

第五章 貧に迫りし時

四百四病のその中に貧程^{うち}つらきものはなし、心は花であらばあれ、深山がくれのやつれ衣^きに誰か思を起すべき、人間萬事金の世の中、金は力なり威力なり、金のみは我らに市民權を與ふ、金なければ學も徳も人をして一市民となすを得ず、此賞讀せらるゝ十九世紀においては金なき人は人にして人にあらざるなり。

我榮譽の時に友人ありしも我貧に迫りてより我は無友となれり、我窮せざりし時に我に信用ありしも我が囊^{のう}の空しくなると同時に我が言^{ことば}は信ぜられざるに至れり、われ友を訪^とふも彼れ我を見るを好まず、我れ彼に援助^{たすけ}を乞へば嫌惡以て我に答ふ、我と共に祈りしもの、我と共に神と國とに事^{つか}へんと誓いしもの、我を兄弟と呼びしもの、今は我の貧なるが故に我とは別世界の人となれり、

落ぶれて袖になみだのかゝる時

人の心の奥ぞしらるゝ

友を信ずる勿れ汝貧に迫りし迄、世の友人は我等の影の如し、彼等は我等日光に歩む間^{うち}は我等と共なれども暗所に至れば我等を離るゝものなり、貧より來る苦痛の中に世の友人に冷遇さるゝ是悲歎の第一とす。

我の貧我獨り忍ぶを得ん、然れども我に依食する我の母我の妻も我が貧なるが故に貧を感じ、我は我と境遇を同ふせる古人の傳を読み以て我が貧を慰め得るとも、彼等是如何にして此鬱を散ずるを得むや、貧より來る苦痛の中に我父母妻子の貧困を見る是れ悲歎の第二とす。

我は食を求めざるべからず、彼處に到り此處を訪ひ、業にあり就かんと欲する時、我貧なるが故に彼より要求さるゝ條件多くして我の受くべき報酬は少く、我は賣人にして彼は買人なれば直段を定むるは全く彼にあり、我不平を唱へて彼の要求を拒めば我は唯我が父母妻子と共に餓死するのみ、もし餓死するものは我一人ならば我が意を張り我が膝を屈せざるものを、然れども今の我は我一人の我にあらざり、我を生みしものゝ爲め、我に淑徳を立つるものゝ爲め、我は我の尊敬せざる人にも服従せざるを得ず、貧より来る苦痛の中に食の爲めに他人に腰をかゝめざるを得ず、是悲歎の第三なり。

富足で徳足るとは眞理にはあらざるけれども確實なる経験なり、奢侈は勿論不徳なり、我富たればとて驕らざるべし、然れども滋養ある食物、清潔なる衣服は自尊の精神を維持するに於て少なからざる勢力を有するものなり、我の最も嫌惡する卑陋なる思想は貧と共に我が胸中を攻撃し、我をして外部の敵と戦ふと同時に内患に備ふるが爲めに常に多端ならしむ、貧より来る苦痛の中に心に卑陋なる思想の湧出するは悲歎の第四なり。

貧は我をして他人を羨ましめ、我を卑屈ならしむると同時に我を無愛相なる者 (Misanthropist) となすものなり、我は集會の場所を忌み、我は交際を避けんと欲す、我が心は益々寒冷頑固となり、靄然たる君子の風、溫雅なる淑女の様は我得んと欲して得る能はず、貧は我を社會より放逐せしむるものなり、貧より来る苦痛の中に、寒固孤獨の念は悲歎の第五なり。

貧は貧を生ずるものなり、持つものには加へられ持たざるものよりは已に持つものをも取り去らる、俗に所謂貧すれば鈍するとの言は心理學上の事實にして經濟學上の原理なり、富者益々富めば貧者は愈々貧なり、貧より

來、苦痛の中に、この絶望に沈む事、この無限の墮落を感ずる事は、悲歎の第六なり。

嗚呼我如何にして此内外の攻撃に當らんか、貧は此身に附くものなれば此身を殺さば貧は絶ゆべし、自殺は羅馬賢人カトー、シセロ等の許せし所、貧てふ無限無終の苦痛より遁れんが爲めには自殺は惟一の方法ならずや、

“He that dieth payeth all his debts.” (死者は悉く負財を返還す)、我の社會に負ふ處、我の他人に負ふ所、我は之を返却するの目的一つとしてあるなし、我は死してのみ此借財より脱するを得るにあらずや、言を休めよ汝美食美服に飽くものよ、彼の一圓に満たざる借錢の爲めに身を水中に投ぜし小婦は癡愚にして發狂せしなりと、彼婦は世に己れの貧を訴ふるの無益なるを知り、彼の純白なる小心は他人に義理を缺くに忍びず終に至りしなり。

“In she plunged boldly,

No matter how coldly

The rough river ran —

Picture it — think of it

Dissolute Man! — Thomas Hood.

然り若し宇宙の大真理として自殺は神に對し己に對し大罪なりとの教訓の存せざりしならば貧の病を療治する爲めに我も我身に此法を施さんものを、然れども嗚呼我神よ爾の恵は我死せずして我を此苦痛より免れ得せしむ、爾に依てのみ貧者も自尊を維持し得べく、卑陋ならずして高尚なるを得るなり。

基督教は貧者を慰さむるに佛教の所謂「萬物皆空」なる魔^ま睡^{すい}的^{てき}の教義を以てせず、基^き督^{とく}教^{きょう}は世^よを、あきらめ、しめずして世に勝^かたしむるものなり、富めると貧なるとは前世の定にあらざして今世に於ける個人的境遇なり、貧は身軀の疾病と同く之を治する能はずんば喜で忍ぶべきものなり、我の貧なる若し我の怠惰放蕩より出しものなれば我は今より勤勉廉節を事とし投費せし富を回復すべきなり、天は自己を助くるものを助く、如何なる放蕩人と雖も、如何なるなまけ者と雖も、一度^{ひろ}飢^へりて宇宙の大道に従ひ、手足を勞し額に汗せば、天は彼をも見捨てざるなり、貧は運命にあらざれば我等手を束て決してこれに甘すべきにあらず、働けよ、働けよ、世界に存する貧の十分の九は懶惰より來る事を記憶せよ、又正直なる仕事は如何に下等なる仕事と雖も決して輕ずる勿れ、何をも爲さざるは罪をなしつゝあるなり (Doing nothing is doing ill)、人を欺き人を殺すのみが罪にあらざるなり、懶惰も罪なり、時を殺すも罪なり、富は祈禱のみに依て來らず、働^{はたら}くは祈^{いの}るなり (Laborare est orare)、身と心とを神に任せ精^{せい}々^{せい}以て働きて見よ、神も宇宙も汝を助け汝の勞力は實るぞかし。

然れども世には「正義の爲めの貧」なるものなきにあらず、ロバート、サウジー曰く「一人の邪魔者の常に我身に付き纏ふあり、其名を稱して正直^{せいちよく}という」と、永久の富は正直に由らざるべからずと雖も正直は富に導くの捷徑^{しやうけい}にはあらざるなり、世に清貧ある事は疑ふべからざる事實なり、或は良心の命を重じ世俗に従はざるが故に時の社會より遮斷さるゝあり、或は直言直行^{やうしゆく}我の傭主^{やうしゆ}を怒らし我の業を奪ひ取らるゝあり、或は我の思想の普通觀念と齟齬するが故に我に衣食を得るの途塞^{みちふさ}がるあり、或は貧家に生れて貧なるあり、或は不時の商業上の失敗に遭ひ、或は天災に罹りて貧に陥るあり、則ち自己以外に源因^{げんいん}する貧ありて毇^{びん}勉も注意も之を取り去る能はざる

の場合あり、如斯かくごとくにして貧の我身に迫るあれば我は勇氣を以て信仰を以て之を忍ばんのみ、而して基督教は此耐たい忍にんを我れに與ふるに於て無上の力を有するものなり。

一、汝な貧する時に先づ世に貧者の多きを思ふべし、日本國民四千萬人中壹ケ年三百圓以上の収入あるものは僅かに十三萬人余なり、則ち戸數百毎に壹ケ月廿五圓以上の収入ある家は僅かに壹戸半を數ふ、百軒の中九十八軒は壹ケ月廿五圓以下の収入あるのみ、而して來年の計を爲し貯蓄を有するもの幾干いくばくかある、來月に備ふる貯蓄を有せざる家何ぞ多きや、人類の過半數は軒端のきばに餌えを求むる雀の如く、山野に食を探る熊の如く、今日は今日を以て足れりとなし、今日得しものは今日消費し、明日は明日に任し、日に日に世渡りするものなり、汝の運命は人類大多數の運命なり、肥馬ひばに跨る貴公子を以て普通人間と思ふ勿れ、彼一人安閑として世を渡り綺羅きらを被り美味に飽ん爲めには數千の貧人は汗滴勞働しつゝあるなり、貧は常にして富は稀なり、汝は普通の人にして彼貴公子は例外の人なり、一人にして忍び能はざるの困難も萬人共に之を忍べば忍び易し、汝は人類の大多數と共に饑餓を感じつゝあるなり。

二、古代の英雄にして智に於ても徳に於ても遙かに汝に勝りしものが汝の貧に勝る貧苦を受けしことを思へ、哲學上神學上信仰上功績上人類の頭と承認せらるゝ使徒保羅パウロは四十年間無私の勞働の後に彼の所有に屬するものとは外衣一枚と古書數卷とのみなりしを思へ（提摩太後書四章十三節）、古哲ソクラトスは日々に二斤のパンと雅典アテ典城ニスの背後はいごに湧出する清水せすいとを以て満足したりしを思え、「これを文天祥ぶんてんしょうの土窖どくに比すれば我が舍は即ち玉堂金屋なり、塵垢じんこうの爪に盈る蟻虱ぎしつの膚を侵すも未だ我正氣に敵するに足らず」と勇みつゝ幽廬ゆうろの中に沈吟せし藤田東

湖を思へ、「道義肝を貫き、忠義骨髓に填ち、直ちに須く死生の間に談笑すべし」と悠然として饑餓に對せし蘇軾を思へ、エレミヤを思え、ダニエルを思へ、和漢洋の歴史何れなりとも汝の意に任せて涉獵し見よ、貧苦における汝の友人は多き事蒼天の星の數の如し。

三、耶穌基督の貧を思え、彼は貧家に生れ、口碑の傳ふる所に依れば彼は十八歳にして父を失ひ、爾後死に至るまで大工職を業とし父の一家を支へしとなり、狐は穴あり空の鳥は巢あり左れど人の子は枕する處だもなしとは基督地上の生涯なりき、僕はその主人に優る能はず、汝の貧困基督の貧困に勝るや、彼は貧者の友なりし、貧しきものは幸なり（路加六章廿節）との非常の言は彼の口より出でしなり、貧ならざれば基督を悟り難し、

* Christ was hungry, Christ was poor,

He will feed me from his store. — Luther's Song.

四、富必しも富ならざるを、知れ、富とは心の満足を云ふなり、百萬圓の慾を有する人には五拾萬圓の富は貧なり、拾圓の慾を有する人には二拾圓は富なり、富むに二途あり、富を増すにあり、慾を減するにあり、汝今は富を増す能わず、然らば汝の慾を減ぜよ、カーライル謂へるあり曰く、「單數も零にて除すれば無限なり（1/0=8の數式）、故に汝の慾心を引下げて世界の王となれ」と、余は五拾萬弗の富を有する貴婦人が貧を懼れて縊死せるを聞けり、金満家の内幕は必しも平和と喜悅とにはあらざるなり、神の子の如き義俠、天使の如き淑徳は寧ろ貧家に多くして富家に尠し、我等は貧にして巨人たるを得るなり、神が汝に與へし貧てう好機械を利用して汝の徳を高め汝の家を清めよ、快樂なる「ホーム」を造るに風琴の備附、下婢下男の雇入を要せず、若し富を得るの目

的は快樂にありとならば快樂は富なしにも得らるゝなり、” My mind to me a kingdom is.” (心ぞ我の王國なり)、
我は貧にして富む事を得るなり。

五、汝今衣食を得るに困しむ、然らば汝も空の鳥、野の百合花の如くなりて汝の運命を天に任せよ、

是故に我なんじらに告ん、生命の爲めに何を食ひ何を飲みまた身軀の爲めに何を衣んと憂慮ふこと勿れ、生命は糧より優り身軀は衣よりも優れる者ならずや、なんぢら天空の鳥を見よ稼ことなく穡ことを爲さず倉に蓄ふことなし然るに爾曹の天の父は之を養ひ賜へり、爾曹之れよりも大いに勝るゝものならずや、爾曹のうち誰か能くおもひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや、また何故に衣のことを思ひわずらふや、野の百合花は如何にして長つかを思へ、勞めず紡がざる也、われ爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だにも其裝ひこの花の一に及ばざりき、神は今日野に在て明日爐に投入れらるゝ艸をも如此よそはせ給へば況て爾等をや嗚呼信仰うすき者よ、然ば何を食ひ何を飲みなにを衣んと思ひわずらふ勿れ、此みな異邦人の求むる者なり、爾曹の天の父は凡て此等のものゝ必需ことを知りたまへり、爾曹先づ神の國と其義とを求めよ然らば此等のものは皆なんぢらに加へらるべし、是故に明日の事を憂慮ふなかれ、明日は明日の事を思ひわずらへ、一日の苦勞は一日にて足れり、(馬太傳六章從廿五節至卅四節)

或佛教家此章句を評して曰く基督教は人を怠惰になさしむるものなりと、然り基督教は多くの佛教徒の今日爲すが如く濟世を怠りつゝ自己の蓄財に汲々たるを獎勵せざるなり、基督教は雀の朝より夕迄忙がしきが如く人をして忙がしからしむるものなり、基督教は富の爲めに人の思慮するを許さず、勿論世に稱する基督信徒必しも皆

空の鳥野の百合花の如くにあらず、或者は蟻の如く取ても取ても溜めついあるなり、或者は狐の如く取りしものは皆隠し置き、何時用ふとも知らず、唯取るを以て快樂となしついあるなり、然れども是基督教にはあらざるなり、汝若し溫屋玻璃の内にナザレの耶穌の弟子ありと聞とも汝の心を傷ましむる勿れ。

哲學者カント云へるあり曰く「宇宙の法則を以て汝の言行とせよ」と、空の鳥野の百合花は此法則に従ひ居ればこそ何を食ひ何を飲み何を衣んとて思ひわづらはざるなり、社會は生存競争のみを以て維持するものにあらざるなり、人は食ふ爲めにのみ此世に來りしにあらざるなり、此地球は神の職工場なれば働くものには衣食あるは當然なり、職工場の職人は衣食の事のみを思ひ煩ひてその職を盡し得ざるなり、我も此宇宙に生を有し宇宙の一部分なれば我若し天與の位置を守らば宇宙は我を養ふなり、エモルソン曰く

“ If the single man plant himself indomitably on his instincts, and there abide, the huge world will come round to him.” — The American Scholar.

〔人もしその本能の示すところに據りその上に屹立せば大世界は來て彼を補翼すべし〕

衣食の爲めに思考の殆ど全量を消費する十九世紀の社會も人も決して基督の理想にあらざるなり。

六、故に汝餓死せんと心配する勿れ、餓死の恐怖は人生快樂の大部分を消滅しつゝあるなり、ナポレオン大帝云へるあり「食ひ過すぎて死するものは食足らずして死するものよりも多し」と、人口稠密なる我國に於てすら

餓死するものとしては實に寥々たるにあらずや、天の人を恵む實に大なり、毎年八百萬石余の米穀は無益有害なる酒類と變化さるゝにも關せず、勞力の大部分は宴會とやら裝飾とやら小兒遊戲的の事物に消費せらるるに關せ

ず、人類の食糧は尚ほ足り過ぎて毎年夥多の胃病患者を出すにあらずや、世に最も有難きものは餓死なり、明治廿二年の統計表に依れば全國に於て途上發病又は饑餓にて死せしものは僅々千四百七十二人なり（消化器病にて死せしものは二十萬五千余人なり）、汝眞理の神を拜しその命令に従はんと勤むるものが如何でか餓死し得べけんや、ダビデ歌て曰く、

われむかし年わかくして今おいたれど義者のすてられ或はその裔の糧すゑこひあるくを見しことなし

（詩篇三十七の二十五）

余は善人の貧するを聞けり、然れ共未だ神を恐れしものい、餓死せしを聞かず、餓死するの恐怖を捨てよ、汝信仰薄きものよ。

七、汝心を靜きよめて良き日の來るを待て、變り易きは世の習なり、而して幸福なるものに取ては千代も八千代も變らぬ世こそ望ましかれども不幸なるものに取ては變り行く世の中程樂しきものはあらざるなり、我の貧は永久まで續くべきにあらず、世の風潮の變り來て「我等の時代」とならん時は我の飢餓より脱する時なり、神は此世の富に勝る心の富を我に賜ふが故に我終生貧なるとも忍び得べし、地は善人の爲めに造られしものなれば我善と義とを慕ふ事切なれば神は我に地の善き物をも賜ふべし、我の今日貧なるは我の心の爲めにして我が世の物に優りて神と神の眞理とを愛せんが爲めなり、信仰の鍛鍊已に足り、肉慾已に減磨げんませられ、我已富貴に負ける慮うれひなきに至て神は世の寶を以て我に授け玉ふなるべし、世に最も憫察すべきものは富を有して之を使用し能はざる人なり、富は神聖なり故に神聖なる人のみ之を使用し得る也、我貧して「人不惟以餅生」「ひととはたたいをもちていきず」を知れり、若し富我に來

るあれば我は富を以て得る能はざる寶を得ん爲めに之を使用すべし、我の貧なる是れ我の富んとするの前徴にあらずや。

八、我に世の知らざる食物あり（約翰傳四章三十二節）、我に永遠永遠なくかわく事なき水あり（全十四節）、人靈の榮譽として最高いときもの即ち神ならでは彼は満足し得べからざるなり（ビクトル、ヒューゴの語）、而して我は此最上の食と飲物とを有す、我實に足れるものにあらずや、如何なる珍味と雖も純白なる良心に勝るものあらんや、罪より免ゆるされし安心、神を友と持ちし快樂、永遠の希望、聖徒の交り——、我は世の富めるものに問はん、君の錦衣君の壯屋君の膳の物君の「ホーム」（若し「ホーム」なるものを君も有するならば）は此高尚無害健全なる快樂を君に與へるや否や、醫師は云はずや快樂を以て食すれば麁食そしょくも軀を養ふべけれ共心痛は消化を害し滋養品も其功を奏する少しと、眞理は心の食物なるのみならず、亦身軀の食物なり、我の滋養は天より來るなり、浩然の氣は誠に實に不死の藥なり、貧しきものよ悦べ、天國は汝のものなればなり。

四百四病の中でも、貧乏ほどつらいものはない。心は花のように美しくても、深山に隠れた粗末な衣服を着ていては、誰が思いを寄せることができるだろうか。人間世界のあらゆることは金が支配する世の中であり、金は力であり威力である。金だけが我々に市民権を与える。金がなければ、学問も徳も、人を一市民とすることはできない。この賞賛される十九世紀において、金のない人は人であつても人ではないのである。

私が名誉ある立場にいた時には友人がいたが、貧乏に追われてからは友人がいない身となつた。私が困窮していなかった時には信用があつたが、私の財布が空になると同時に私の言葉は信じられなくなつた。私が友人を訪ねても彼は私を見るのを好まず、私が彼に援助を乞えば嫌悪をもつて私に答える。私と共に祈つた者、私と共に神と国に仕えようと誓つた者、私を兄弟と呼んだ者、今は私の貧しさゆえに私とは別世界の人となつたのである。

落ちぶれて袖に涙がかかる時、

人の心の奥底が知られるものである。

友を信じてはならない、あなたが貧乏に迫られるまでは。世の友人は我々の影のようである。彼らは我々が日光の中を歩む間は我々と共にあるが、暗い場所に至れば我々を離れるものである。貧しさから来る苦痛の中で、世の友人に冷遇されることが、悲嘆の第一である。

私の貧しさは私一人なら忍ぶことができるだろう。しかし、私に頼つて生活する私の母、私の妻も、私の貧し

さゆえに貧しさを感じた。私は、私と境遇を同じくした古人の伝記を読み、それによって私の貧しさを慰めることができるとしても、彼女たちはどのようにしてこの憂鬱を晴らすことができるだろうか。貧しさから来る苦痛の中で、私の父母妻子が貧困を感じるのを見ることが、悲嘆の第二である。

私は食を求めざるを得ない。あちらこちらを訪ね歩き、職に就こうと欲する時、私が貧しいがゆえに、相手から要求される条件は多く、私が受けるべき報酬は少ない。私が売り手で彼が買い手であるため、値段を定めるのは全く彼にある。私が不平を唱えて彼の要求を拒否すれば、私はただ私の父母妻子と共に餓死するのみである。もし餓死するのが私一人ならば、私は意地を張り、膝を屈しなかつたであろう。けれども今の私は、私一人の私ではない。私を生んだ者のため、私を支えてくれる者（妻）のため、私は私の尊敬しない人にも服従せざるを得ない。貧しさから来る苦痛の中で、食のために他人に腰をかめざるを得ないことが、悲嘆の第三である。

富が満ちれば徳も満ちるという法則は、絶対的な真理ではないかもしれないが、確実な経験である。贅沢はもちろん不徳である。私が富んだとしても、驕るべきではない。しかし、滋養のある食物、清潔な衣服は、自尊の精神を維持する上で少なからぬ力を持っている。私が最も嫌悪する卑しい思想は、貧しさと共に私の胸中を攻撃し、私を外部の敵と戦うと同時に内部の患えにも備えさせるため、常に多忙な状態にさせてしまう。貧しさから来る苦痛の中で、心に卑しい思想が湧き出すことが、悲嘆の第四である。

貧乏のために私は他人を羨ましく思うようになり、貧乏は私を卑屈にさせると同時に、私を無愛想な者とした。私は集会の場所を忌み、交際を避けようとする。私の心は益々寒冷頑固となり、穏やかな君子の風格や温雅な淑

女の様子を、私は得ようとしても得ることができない。貧しさから来る苦痛の中で、寒固孤独の念を抱くことが、悲嘆の第五である。

貧乏は貧乏を生むものである。「持つ者には加えられ、持たざる者からは既に持つものをも取り去られる」。俗にいう「貧すれば鈍する」という言葉は、心理学上の事実であり経済学上の原理である。富者は益々富み、貧者はますます貧しくなる。貧しさから来る苦痛の中で、この絶望に沈むこと、この無限の墮落を感じることが、悲嘆の第六である。

ああ、私はどのようにしてこの内外の攻撃に当たるべきだろうか。貧乏はこの身に付くものなので、この身を殺せば貧乏は絶えるはずである。自殺はローマの賢人カトー、キケロなどが許したところである。貧乏という無限で終わらなき苦痛から逃れるためには、自殺は唯一の方法ではないだろうか。「死者は全て負債を返還する」。私が社会に負うところ、私が他人に負うところ、私はこれを返却する目的の一つとして持たない。私は死んでこそ、この借財から脱することができないのだろうか。言葉を休めよ、汝、美食美服に飽きる者よ。あの、一円に満たない借銭のために身を水中に投じた若い婦人は、愚かで発狂したのだと言うが、あの婦人は世に自分の貧しさを訴えることが無益であることを知り、その純白な小心は他人に義理を欠くことに耐えられず、ついにはここに至ったのである。

「彼女は大胆に飛び込んだ。

どんなに冷たくても

荒々しい川の流れに

想像してみてくれ、考えてくれ、

放蕩者め！」——トーマス・フッド

然り。もし宇宙の大真理として、自殺は神に対し、自分に対し大罪であるという教訓が存在しなかったならば、貧乏の病を治療するために私も我が身にこの法を施したであらう。けれども、嗚呼私の神よ、あなたの恵みは私が死なずして私をこの苦痛から免れさせてくださる。あなたによつてのみ、貧者も自尊を維持でき、卑しくならず高尚でいられるのである。

キリスト教は、貧者を慰めるのに、仏教の言う「万物皆空」という麻醉のような教義を用いない。キリスト教は、世を諦めさせるのではなく、世に勝たせるものである。富むことと貧しいことは、前世の定めではなく、今世における個人的な境遇である。貧乏は身体の病氣と同じく、これを治すことができなければ喜んで忍ぶべきものである。私の貧しさがもし私の怠惰や放蕩から出たものならば、私は今から勤勉と儉約を心がけ、浪費した富を回復すべきである。天は自らを助ける者を助ける。いかなる放蕩者であっても、いかなるなまけ者であっても、一度翻って宇宙の大道に従い、手足を動かさし額に汗を流せば、天は彼をも見捨てない。貧乏は運命ではないから、我々手をこまねいて決してこれに甘んじるべきではない。働け、働け。世界に存在する貧しさの十分の九は、怠惰から来ることを記憶せよ。また、正直な仕事はいかに下等な仕事であっても決して軽んじてはならない。何もしないのは罪を犯しつつあるのである(何もしないことは悪いことだ)。人を欺き人を殺すことのみが罪ではない。

怠惰も罪であり、時を殺すのも罪である。富は祈祷のみによって来るのではない。「働くことは祈ることである」。身と心とを神に任せ、精一杯働いてみよ。神も宇宙も汝を助け、汝の労力は実を結ぶであろう。

しかし世には「正義のための貧」なるものがないわけではない。ロバート・サウジーは「一人の邪魔者が常に我が身に付き纏う。その名を正直という」と言っている。永久の富は正直によらざるを得ないとはいえ、正直は富に導く近道ではない。世に清貧があることは疑うべくもない事実である。あるいは良心の命令を重んじ世俗に従わないがゆえに、当時の社会から遮断されることがある。あるいは直言直行が私の雇用主を怒らせ、私の仕事を奪い取られることがある。あるいは私の思想が一般的な観念と食い違うがゆえに、私に衣食を得る道が閉ざされることがある。あるいは貧家に生まれて貧しいことがある。あるいは不慮の商業上の失敗に遭い、あるいは天災に見舞われて貧困に陥ることがある。すなわち、自己以外に原因する貧困があり、勤勉も注意もこれを取り去ることができない場合がある。このようにして貧乏が私の身に迫るならば、私は勇気と信仰をもってこれを忍ぶだけである。そしてキリスト教は、この耐え忍ぶ力を私に与えるにおいて無上の力を持っているのである。

一、あなたが貧しい時に、まず世に貧しい者が多いことを思うべきである。日本国民四千万人の中で、一年間に三百円以上の収入がある者はわずか十三万人余りである。すなわち、百戸ごとに一ヶ月二十五円以上の収入がある家はわずか一戸半を数える。百軒のうち九十八軒は一ヶ月二十五円以下の収入があるのみである。そして、来年の計画を立てて貯蓄を有する者がどれほどいるだろうか。来月に備える貯蓄がない家がどれほど多いことか。人類の過半数は、軒先に餌を求める雀のように、山野に食を探る熊のように、今日は今日をもって十分とし、今

日得たものは今日消費し、明日は明日に任せ、日々世渡りをする者である。あなたの運命は、人類の大多数の運命である。肥えた馬にまたがる貴公子をもつて普通の人と思つてはならない。彼一人が安閑として世を渡り、きらびやかな衣服をまとい美味に飽きるためには、数千の貧しい人々が汗を流し労働しつゝあるのである。貧しさは常であり、富は稀である。あなたは普通の人であつて、あの貴公子は例外の人である。一人で耐え忍ぶことができない困難も、万人共にそれを忍べば忍びやすい。あなたは人類の大多数と共に飢餓を感じつつあるのである。

二、古代の英雄にして、知においても徳においても遙かにあなたに勝つていた者が、あなたの貧しさより勝る貧苦を受けたことを思うべきである。哲学上、神学上、信仰上、功績上、人類の頭と承認される使徒パウロは、四十年間無私の労働の後に、彼の所有に属するものといへば外衣一枚と古書数巻のみであつたことを思うべきである。古哲ソクラテスは、日々に二斤のパンとアテネ城の背後から湧き出る清水をもつて満足していたことを思うべきである。「これを文天祥の土牢に比すれば我が住まいは即ち玉堂金屋である。塵や垢が爪に満ち、ノミやシラムミが皮膚を侵しても、未だ私の正気に敵するには足らない」と勇みつつ奥深い場所で沈思した藤田東湖を思うべきである。「道義は肝を貫き、忠義は骨髓に満ち、直ちに死と生の間に談笑すべきである」と悠然として飢えと渴きに対した蘇軾を思うべきである。エレミヤを思うべきである、ダニエルを思うべきである。和漢洋の歴史のいずれであつてもあなたの意に任せて調べてみるが良い。貧苦におけるあなたの友人は、蒼天の星の数のように多いのである。

三、イエス・キリストの貧しさを思うべきである。彼は貧しい家に生まれ、言い伝えの伝えるところによれば、

彼は十八歳で父を失い、その後死に至るまで大工職を仕事とし、父の一家を支えたという。「狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には枕する場所さえもない」とは、キリストの地上の生涯であつた。しもべはその主人に優ることはできない。あなたの貧困はキリストの貧困に勝るだろうか。彼は貧しい人々の友であつた。「貧しい者は幸いである」という非常な言葉は、彼の口から出たのである。貧しくなければ、キリストを悟ることは難しいのである。

キリストは飢え、キリストは貧しかった。

彼はその蓄えから私に食べ物を与えてくれるだろう。——ルターの賛美歌

四、富が必ずしも富ではないことを知るべきである。富とは心の満足をいうのである。百万円の欲望を有する人には、五十万円の富は貧しさである。十円の欲望を有する人には、二十円は富である。富むには二つの道がある。富を増すこと、欲望を減らすことである。あなたは今は富を増すことはできない。それならば、あなたの欲望を減らすべきである。カーライルが言つた言葉がある。「単数もゼロで割れば無限である。ゆえに、あなたの欲望の心を引き下げて世界の王となれ」と。私は五十万ドルの富を有する貴婦人が、貧しさを恐れて首を吊つて死んだのを聞いたことがある。金満家の内情は必ずしも平和と喜びにあるわけではない。神の子のような義侠心、天使のような淑徳は、むしろ貧しい家に多く、裕福な家には少ない。我々は貧しくても巨人となることができるのである。神があなたに与えた貧乏という好機を利用して、あなたの徳を高め、あなたの家を清めるべきである。快樂なる「ホーム」(家庭)を築くの、オルガンの備え付けや、下女下男の雇入れは必要としない。もし富を

得る目的が快樂にあるというのならば、快樂は富がなくても得られるのである。「心こそが私の王国である」。私は貧しくても富むことができるのである。

五、あなたは今、衣食を得るのに苦しんでいる。それならば、あなたも空の鳥、野の百合花のようにあり、あなたの運命を天に任せるべきである。

何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配したり、何を着ようかと、自分のからだのことで心配したりするのはやめなさい。いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものではありませんか。空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。それでも、あなたがたの天の父は養つていてくださいます。あなたがたはその鳥よりも、ずっと価値があるではありませんか。あなたがたのうちだが、心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができるでしょうか。なぜ着る物のことで心配するのですか。野の花がどうして育つのか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。榮華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装っていませんでした。今日あつても明日は畑に投げ込まれる野の草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、もっと良くしてくだらないでしょうか。信仰の薄い人たちよ。ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくてよいのです。これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。ですから、

明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦勞はその日その日に十分あります。

(マタイの福音書六章二十五節～三十四節)

ある仏教家がこの章句を評して言う。「キリスト教は人を怠惰にさせるものだ」と。然り、キリスト教は多くの仏教徒が今日なすように、世を救うことを怠りつつ自己の蓄財に汲々とするのを奨励しないのである。キリスト教は雀が朝から夕まで忙しいように、人をして忙しくさせるものである。キリスト教は、富のために人が思慮するのを許さない。もちろん、世に称するキリスト信徒は必ずしも皆空の鳥、野の百合花のようにあるわけではない。ある者は蟻のように、取っても取っても溜め続けているのである。ある者は狐のように、取ったものは皆隠し置き、いつ使うとも知らず、ただ取ることをもって快樂とし続けているのである。しかし、これはキリスト教ではないのである。あなたがもし温室の中にナザレのイエスの弟子がいると聞いても、あなたの心を痛ませるべきではない。

哲学者カントが言った言葉がある。「宇宙の法則をもつてあなたの言行とせよ」と。空の鳥、野の百合花は、この法則に従っているからこそ、何を食べ何の飲み何を着ようかと思ひ煩わないのである。社会は生存競争のみをもつて維持するものではない。人は食べるためだけにこの世に來たのではない。この地球は神の職工場であるから、働く者には衣食があるのは当然である。職工場の職人は、衣食のこのみを思ひ煩つては、その職を尽くすことができない。私もこの宇宙に生を有し、宇宙の一小部分であるから、もし私が天から与えられた位置を守るならば、宇宙は私を養うのである。エマーソンは言う。

「もし一人の人間が不屈に自分の本能に身を置き、そこに留まるならば、広大な世界が彼に味方するだろう」
— アメリカの学者。

衣食のために思考のほとんど全量を消費する十九世紀の社会も人も、決してキリストの理想ではないのである。六、ゆえにあなたは餓死するのではないかと心配してはならない。餓死の恐怖は、人生の快楽の大部分を消滅させつつある。ナポレオン大帝が言った言葉がある。「食べ過ぎて死ぬ者は、食べるものが足りなくて死ぬ者よりも多い」と。人口が稠密な我が国においてすら、餓死する者というのは本当に極めて少ないのではないか。天が人に恵むことは実に大きい。毎年八百万石余りの米穀は、無益で有害な酒類へと変化させられるにも関わらず、労働の大部分は宴会だの装飾だの子供の遊びのような事物に消費されるにも関わらず、人類の食糧はなお足り過ぎて、毎年おびただしい数の胃病患者を出しているのではないか。世に最もありがたいものは餓死である。明治二十二年の統計表によれば、全国において道中で病氣になったか、または飢餓で死んだ者は、わずかに千四百七十一人である。あなたが真理の神を拝み、その命令に従おうと努める者が、どうして餓死し得るだろうか。ダビデは歌って言う。

若かったころも年老いた今も私は見たことがない。正しい人が見捨てられることを。その子孫が食べ物を乞うことを。
(詩篇三十七篇二十五節)

私は善人が貧しくなったのを聞いたことはある。けれども、まだ神を恐れる者が餓死したのを聞いたことはない。餓死する恐怖を捨てよ、汝、信仰の薄い者よ。

七、あなたは心を静めて良い日が来るのを待つべきである。変わりやすいのは世の習いである。そして、幸福な者にとっては千代も八千代も変わらない世こそ望ましいけれども、不幸な者にとっては、変わりゆく世の中ほど楽しいものはないのである。私の貧しさは永久まで続くべきではない。世の風潮が変わり、「我々の時代」となる時は、私が飢えと渇きから脱する時である。神はこの世の富に勝る心の富を私にくださるゆえに、私は終生貧しいとしても忍び得るのである。地は善人のために造られたものであるから、私が善と義とを切に慕うならば、神は私に地の良い物をもくださるはずである。私が今日貧しいのは、私の心のためであり、私が世の物に優つて神と神の真理とを愛するためである。信仰の鍛錬が既に十分となり、肉欲が既に減り磨かれ、私が既に富貴に負ける憂いがないに至つて、神は世の宝をもつて私に授けくださるはずである。世に最も憐れむべき者は、富を有してこれを使用できない人である。富は神聖である。ゆえに神聖な人のみがこれを使用し得る。私は貧しくして「人はただパンのみをもつて生きるのではない」ということを知っている。もし富が私に来ることがあれば、私は富をもつて得ることができない宝を得るために、これを使用すべきである。私の貧しいことは、これこそ私が富もうとする前兆ではないだろうか。

八、私には世の知らない食物がある。私には限りなく永遠に渴くことのない水がある。人の魂の荣誉として最も高きもの、すなわち神でなくては、人は満足することができないのである。そして私はこの最上の食と飲み物とを有している。私は実に満ち足りている者ではないだろうか。いかなる珍味であっても、純白な良心に勝るものがあるだろうか。罪から免ぜられた安心、神を友と持った快楽、永遠の希望、聖徒の交わり——。私は世の富

める者に問おう。あなたの錦の衣、あなたの立派な家、あなたの食膳の物、あなたの「ホーム」（もし「ホーム」というものをあなたが有するならば）は、この高尚で無害で健全な快楽をあなたに与えるだろうか、否か。医師は言わないだろうか、喜びをもって食べれば粗食も身体を養うことができるけれども、心痛は消化を害し、滋養品もその功を奏することが少ないと。真理は心の食物であるのみならず、また身体のものである。私の滋養は天から来るのである。浩然の気は誠に実に不死の薬である。貧しい者よ、喜びなさい。天国はあなたのものなのである。